

—JNMS のページ—

Journal of Nippon Medical School

Vol. 76, No. 6 (2009 年 12 月発行)

Summary

Journal of Nippon Medical School に掲載しました Original 論文の英文「Abstract」を日本医科大学医学会雑誌に和文「Summary」として著者自身が簡潔にまとめたものです。

Detection of Arrhythmogenic Substrates in Prior Myocardial Infarction Patients with Complete Right Bundle Branch Block QRS Using Wavelet-Transformed ECG

(J Nippon Med Sch 2009; 76: 291-299)

完全右脚ブロックをともなう心筋梗塞発症後の患者におけるウェーブレット変換心電図を用いた不整脈基質の検出

村田広茂 小原俊彦 小林義典 宮内靖史
加藤貴雄 水野杏一

日本医科大学大学院医学研究科器官機能病態内科学

目的：完全右脚ブロックをともなう心筋梗塞後の患者において致死的不整脈の発生を非侵襲的に予知することは重要であるが、従来の方法では困難である。そこで、時間分解能の高いウェーブレット変換心電図の有用性を検討した。

方法：対象は、完全右脚ブロック 22 例で、心筋梗塞後に心室頻拍を認めた 5 例 (VT 群) と心室頻拍のない 7 例 (Non-VT 群)、対照群 10 例である。高分解能心電図 (サンプリング 10 kHz) を記録し 8 つの誘導 (I, aVF, V1 から V6) の任意の QRS 波形 (300 ms) を抽出しガボール関数でウェーブレット変換した。各周波数帯 (40~200 Hz) のパワー値のピークを計測し、同じ時相の 40 Hz のパワー値に対する比率 (P60/40, P80/40, P120/40, P150/40, P200/40) を計算した。P120/40, P150/40, P200/40 が 50% 以上を異常高周波数成分 (AHFC) と定義し、AHFC を認めた誘導の数 (NL-AHFC) を比較した。

結果：P120/40, P150/40, P200/40 は対照群に比べ有意に Non-VT 群で高値であった。 ($P < 0.001$, $P < 0.001$, $P < 0.001$) また、“すべての誘導で P150/40 < 50%” を正常とすると、健常者を除外するのに有用であった。VT 群の NL-AHFC (P120/40) と NL-AHFC (P150/40) は、Non-VT 群に比べて有意に高値を示した。 (3.0 ± 1.2 vs. $1.0 \pm$

1.0 , $P = 0.01$; 3.2 ± 0.4 vs. 1.4 ± 0.8 , $P = 0.001$) “NL-AHFC (150/40) ≥ 3 ” を陽性とする、心室頻拍検出における感度、特異度、陽性的中率、陰性的中率は 100, 86, 83, 100% であった。

結論：少数例の検討ではあるが、本研究によって、ウェーブレット変換心電図が完全右脚ブロックをともなう心筋梗塞後患者における、心室頻拍の予測に有用である可能性が示された。

Clinical Features of Antinuclear Antibody-positive Patients with Atopic Dermatitis

(J Nippon Med Sch 2009; 76: 300-307)

抗核抗体陽性アトピー性皮膚炎患者の臨床的特徴についての検討

東 直行^{1,2} 新見やよい¹ 青木見佳子¹ 川名誠司¹

¹日本医科大学大学院医学研究科皮膚粘膜病態学²日本医科大学多摩永山病院皮膚科

目的：アトピー性皮膚炎 (AD) 患者の内、抗核抗体 (ANA) 陽性群 (+) と陰性群 (-) について、臨床的特徴を比較検討。

方法：対象は AD 100 例で、皮膚重症度をスコア化し、日光過敏の既往の問診を実施。WBC, WBC 分画, 血小板数, 総 IgE 値, LDH 値, 特異的 IgE 値, ANA を測定。ANA (+) 群では、抗 ds-DNA Ab, 抗 SS-A Ab, 抗 SS-B Ab, 補体の測定も実施。

結果：1) AD 患者の 19% に ANA (+) (40~640 倍) を認め、健常人の ANA 陽性率 6.8% (1,004 例中 68 例) に比し有意に高率 ($p = 0.0001$, オッズ比 2.8)。2) ANA (+) AD で、抗 ds-DNA Ab などほかの自己抗体が陽性になった症例なし。3) ANA (+) の男性 AD では、日光過敏と関連あり ($p = 0.0346$)。4) ANA (+) AD は、ANA (-) AD と比し、スギ特異的 IgE 値が有意に高値 ($p = 0.0232$)。5) ANA (+) AD は、重症度と末梢好塩基球数 ($r = 0.513$, $p = 0.0344$)、重症度と LDH 値 ($r = 0.741$, $p = 0.0056$) が有意に正の相関あり。AD では、一般的に重症度と末梢好酸球数が正の相関を示すが、ANA (+) AD ではなし。

結論：ANA (+) AD は、AD の中で 1 つの亜集団を形成していることが示唆された。

—JNMS のページ—

Journal of Nippon Medical School

Vol. 77, No. 1 (2010年2月発行)

Summary

Journal of Nippon Medical Schoolに掲載しましたOriginal論文の英文「Abstract」を日本医科大学医学会雑誌に和文「Summary」として著者自身が簡潔にまとめたものです。

A New Look at Criteria for Damage Control Surgery

(J Nippon Med Sch 2010; 77: 13-20)

ダメージコントロール手術の新しい適応基準

松本 尚 益子邦洋 阪本雄一郎 朽方規喜
原 義明 横田裕行

日本医科大学大学院医学研究科侵襲生体管理学

目的: ダメージコントロール手術 (Damage control surgery : DCS) の必要性を迅速に決断するための簡便で、実用的な基準を確立する。

方法: 循環動態が不安定な重症の腹部、もしくは骨盤外傷に対してDCSが行われた34例を対象に、患者背景、臨床経過、血液検査所見、転帰を後方視的に検討した。

結果: 全体の生存率は55.9%であり(生存群:n=19; 非生存群:n=15)、予測生存率0.5671と同等の結果であった。手術開始時の収縮期血圧(Systolic blood pressure : SBP)は非生存群の全例で90 mmHg未満であり、平均SBPは生存群と比較して有意に低かった(69.6±14.8 vs 93.2±22.9 mmHg, p=0.006)。Base Excessは2例を除き、非生存群が生存群よりも有意に低値であった(-11.5±5.3 vs -5.5±4.9 mmHg, p=0.008)。深部体温は非生存群のすべてで35.5℃未満であった。手術開始時のSBP<90 mmHg, base excess<-7.5 mmol/L, 深部体温<35.5℃)の3つの指標すべてが揃った症例のDCS成功率(28.6%)は、それ以外の症例(75.0%)よりも有意に低値であった(p=-0.014)。

結論: 今回の結果から、3つの指標のうち1つないし2つを満たした段階でDCSを決断すべきと考えられた。この基準はDCSの適応を広くするものであるが、重症の体幹部外傷の救命を第一に考えれば、“オーバートリージ”は容認されるものと考えられる。

One-Year Evaluation of Combined Treatment with an Intranasal Corticosteroid and Montelukast for Chronic Rhinosinusitis Associated with Asthma

(J Nippon Med Sch 2010; 77: 21-28)

気管支喘息を合併する慢性副鼻腔炎に対するステロイド点鼻とモンテルカスト併用治療の一年間の効果

野中 学^{1,2} 酒主敦子¹ 草間 薫^{1,2} 荻原 望^{1,2}
八木聰明¹

¹日本医科大学大学院医学研究科頭頸部・感覚器科学²日本医科大学多摩永山病院耳鼻咽喉科

成人型気管支喘息を合併する慢性副鼻腔炎に対するステロイド点鼻のみの治療効果は十分ではない。今回われわれは、成人発症の気管支喘息を合併する慢性副鼻腔炎に対するステロイド点鼻と抗ロイコトリエン薬の併用治療による一年間の効果を検討した。20人の成人型気管支喘息を合併する慢性副鼻腔炎患者にプロピオン酸フルチカゾン(200 µg/day)点鼻とモンテルカスト(10 mg/mL)を一年間投与し、投与前後に鼻茸の大きさ、CT、血中好酸球比率を調べ、その改善から併用治療の効果を検討した。

鼻茸の大きさ、CT陰影、血中好酸球比率、いずれの指標においても、治療前と比較して、治療開始6カ月、12カ月の時点で有意に改善がみられた。また治療開始6カ月と12カ月の時点で治療前と比較し改善率を求めると、血中好酸球比率の改善率はCT陰影の改善率と有意に相関した。

成人発症の気管支喘息を合併する慢性副鼻腔炎に対するステロイド点鼻とモンテルカストの併用治療は、少なくとも一年間是有効であると考えられた。